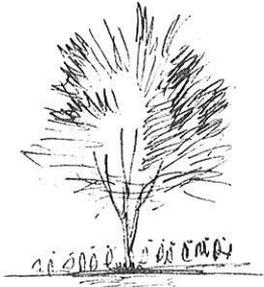


光の子



No. 80 1998. 10. 1

● 神の召しに応える (ヘブライ人への手紙第5章4節)



「おつきさまのなかには」

え・中島英子

「秋」

水平線の高き日燕婦りけり

曼珠沙華枯れつつ黒を加へけり

新涼の暈にありし竹の笛

月を待つ島の暗きに舟溜り

境内に土俵の跡や威し銃

盛り上り黒くなりゆく秋の潮

噴煙の西へ流るる大花野

伊藤 通明 (「白桃」主宰)

伴走者キリスト

ピリピの信徒への手紙 3・19

彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、
恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。

理事長 福島 勲

今春長野で開かれたパラリンピックの女子バイアスロンで、小林深雪選手が金メダルに輝いた。

この競技はスキーで滑って途中に射撃が加わる。目の不自由な人たちが競うのであるが、ガイド（伴走者）が必要である。

先に滑走する伴走者に従って滑り、射撃は特殊な電子音響装置を使う。音を頼りに的に向かって撃つ。見事優勝した小林さんは、伴走者の中村由紀さんと抱き合って、喜びの涙を流していた劇的感動のシーンだった。ふと私は、われわれの人生もこの競技に似ていると思つた。

われわれ魂の健常者だと思つているのは大きな誤りで、重度の障害者なのである。賢者ぶるがその実愚鈍者、善人を装うが偽善者であり、更にいえば悪魔的存在者である。

善の目が霞んで的が定まらず、走るべき方向さえわからない。窮まさしく伴走者が必要である。窮極の伴走者が教師でも、伴侶でもなく神に他ならない。

躓き倒れ、失望し、立腹したとき、近頃の若者の言葉のようにキレたとき、悪に手を染めようとすると、きどめ、望みを与え、悪を阻止し守ってくれるのは、われわれの知性や悟性や良心でもない。

神の指示、神のささやきを聞き分け歩むのでなければ、この危機を脱することは出来ない。

これには人はまことの敬虔さ、謙虚さを必要とする。

イエス誕生の時、東方の学者達がきて、かいつか桶に伏している幼児を礼拝したという聖書の物語は、高慢な人間への深遠絶妙な訓えである。世の賢者たちは聖書の示す言葉や物語に耳を傾けようとはしない。それらをナンセンスなこと、またせいぜい古代の人たちの神話の記録くらいにしか認めようとしぬい。

敵をも愛せよといわれるイエスの攻撃の対象は、学者、パリサイ人富める者らであった。

学者や教師は傲慢だ、政治家や偽宗教家は偽善で、官僚は権威を笠に着て不遜の限りを尽くす。

人間って何と己が腹を神としたがるのか（ピリピの信徒への手紙三・十九）

幸福であるとは、何のおそれもなしに自分を眺めようということ（ヴ・ベンヤミン）、俯仰天地に愧けない（孟子）という。そんな生活の出来る者など一人もないのに。伴走者不要で、独立できると信じている。「たとえどんなに単純にばかげたように見えても、それは神のすぐれた

た権威と力と知恵にもとづくみ言葉であり、みわざであり、物語であり審きなのである。

そして知者賢者を愚かにする書物であり、知恵のない者、単純な者だけに理解される書物である（マタイによる福音書十一・二十五）

聖書は尽くし得ない鉾山でありこの本の中にキリストが横たわつておられるのである。（ルター・卓上語録）

賢くなると思われる科学万能を掲げる今日の世界は、神との距離をますます大きく拡げている。

他人ごとではない。キリスト者と自認している者の中に独走している者がいないだろうか。

聖書の原義からかけ離れた自己流の解釈をして、聖書学者ぶる者、時代に迎合して福音を歪める者、神の宮を強盗の巣とし（マタイによる福音書二十一・十三）聖なるものを俗と化し、兄弟姉妹と呼びながら隣人となれない（ルカによる福音書十・二十五・善いサマリヤ人のたとえ）者がいるだろう。

ともに伴走者イエスからはほど遠いところを、わがもの顔に走っている人よ、どこへどう走っていいこうと

2つの文化に生きる

14

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

入ってきた時があつて、後でみんなで吹き出してしまったことがあつた。いずれにしても日本とアメリカの時差は約半日である。日本が起きている時はアメリカが眠っていて、アメリカが起きている時は日本が眠っているわけだ。日本が「ああ、今日も一日よく働いた。もう寝ようか。」と思つている時に、アメリカでは「さあ、これから新しい一日が始まるんだ。」と力が漲っている訳だ。

時差ボケと一言にいうけれども、この全く逆さまの生活に慣れるのは、やはり数日はかかつてしまう。

昼間、異常に眠くなったり、夜中の三時に目が覚めて、一日の活動を始めてしまつたり、朝食を食べているのか、夕食を食べているのか、分からないまま数日間を過ごすことになる。飛行機の中もこれはまた、面白い。夫の田舎はテネシー州なのだが、朝、テネシーを発ち、お昼頃シカゴに着く、そこから国際線に乗って成田空港まで延々十三時間かかる。機内では映画を観たり、飲み物を飲んだり、朝食か夕食か分からない食事を三回ほどする。そして成田空港に着いてみると、翌日の夜になつてくる。今回、成田空港に着いた時、娘が、「お母さん、夕食を三回も食べちゃったね。」と嬉しそうに言つて

いたけれど、実際の食事は何食だったのか考えると分からなくなつてしまう。時差を利用して面白い体験もできる。今年は、私の誕生日の前日に飛行機に乗ってみた。そして日本に着いてみると、お誕生日はもう殆ど終わつていて、家につく頃にはもう寝る時間だった。「お母さん、今年を年をとらないことにしたから。」と家族に宣言して床に着いたのだが、本当に今年は一つ年をとつたという実感が無い。

この夏のアメリカ訪問は一年半ぶりだったが、みな元気そうで何よりだった。子どもたちは一年半というブランドが丸で全くなかつたように、いとこ同士で、いつものようにはしゃぎまわつた。芝生を駆け回りながらボール投げ、水遊び、かくれんぼ、プールなど、本当によく遊んだ。

「もうすぐ運転免許が取れる！」と目を輝かせて教えてくれた十五歳になる姪がCDプレイヤーを持ち込み、今流行りの曲をみんなで聞いたり踊ったりという新しい遊びも加わつたりした。子どもたちの年齢が上がるに連れて、もめ事が出てくるのも成長の一つということも実感した。前回までは十五歳の姪がすべての遊びを仕切っていたのだが、今回は「それは嫌だ。こつちをしたい」など、自

己主張が加わつた。特に、十一歳の娘は今まではシャイ（恥ずかしがり屋）で通つていたが、いつもになく積極的に自分の意志を伝えていた。私はその光景を眺めながら娘は九月から始まる新しい生活のことを意識しているのではないかと思つたりした。

新しい生活。この夏のバーガー家での一大決心は子どもたちを日本の学校から都内のアメリカンスクールに移したことだ。これは突然、思いついたことではなく、長い間、家族の中で考え暖めてきた上での決断だった。子どもたちは日本の学校では、勉強面でも友だち関係でも特に問題があつたわけではないのだが、どうしても二つの国の教育を受けさせたという願いから実行した。「国際社会」と一言でよく言われるが、その本当の意味は何なのだろうと改めて考えさせられている。二つの文化に生きる子どもたちがその両方の良い面を吸収して育つていって欲しいと心から願つてやまない。



福祉キャンペーン

彫刻家 中島 陸雄

最近ではキャンペーンばかりである。何でもかんでもキャンペーンだ。したがって私などは、その言葉の厳密な意味も知らずに、わからない言葉の横行を、あれよあれよと見ているだけである。

先日、久しぶりに家にいることが出来た。電話がかかってきた。知らない人からである。「福祉キャンペーンです。ご協力下さい。」だいたい見当がついた。新聞への広告依頼である。つまり、A新聞に個人や法人、団体などで広告を出し、その費用で交通遺児などを、いくつかの施設に招いて、体験や交流を行うという企画である。そして、これらの行事に、集めたお金の八十五パーセントを当てるということであった。

説明を聞いて、これはよい企画だと思った。私は、すぐに賛同して広告をお願いすることにした。もちろん、自分の名前を知ってもらおうなどという考えはない。あくまでも、この福祉キャンペーンに同調したのであって、私の小さな負担が、少しでも役に立てば、と思っただけである。その後、予定の日に、この広告は

新聞に出された。そして、夏休みのある日、行事の出発の日に改めて電話が入った。「おかげ様で、今日百何十人が出発しました。ありがとうございます。ごさいました。」と念が入っていて一件落着である。安心した。こういう良心的なものなら、納得できるキャンペーンだ、と思った。

ところがその後、全く別な会社から電話が入った。「福祉キャンペーンです。」

話を聞いてみると、今度のは、ただ新聞に名前を載せるだけのようである。もちろん、福祉の大切さを呼びかける文があり、その回りに、それぞれ名前を連ねるのである。そこで、こちらの企画の方は断ることにした。すると「あなたの様な福祉にご理解のある方には、是非ともご協力をいただかないと。」ときた。私が福祉にご理解があるのかないのか、知らないだろうに、一度も会ったこともないのに、どこで電話番号を調べたのか・・と思った。だから「私は福祉には全く理解はないんです。大体福祉は国が中心にやるべきで、個人には限界がありますか

ら・・。」と言ってやった。向こうは向こうで「いや、福祉というものは、そういうものではありません、福祉というものは・・。」私は「勘弁して下さいよ。」と言って電話を切ってしまった。やれやれ、と思った。

何という事だ。こういうやり方は、企画そのものは決して悪いものではないかも知れないが、公告の取り方に関しては、余り良心的だとは言えないように思う。なんだか割り切れない気持ちが残ってしまう。

すると、同じ日の夕方、全く別な会社から同じ様な広告依頼の電話が入った。もう、あまり深く話を聞く気になれなかった。いい加減で電話を切ってしまった。

たしかに福祉というものは大切である。しかし、だからと言って、強引に押しつけてくる様なやり方は、考え物である。そのようなことが、本当に真剣に福祉に取り組む人たちにとって、むしろ大きな障害になるだろう。

半月もたったのだろうか、以前断ったところでは思っていたのに、例の福祉キャンペーンを企画する会社から電話があった。「だめです。お断りします。」という私の言葉に対して「今回限りということ、つきあっていたらとおっしゃっていましたので、新聞への枠を作りましたし、原稿もできていますから・・。」というのである。こちらでは、そんな約束をした覚えはない。しかし、これは、どんなにやり取りしても、「約束した。」「いやしない。」と、水掛け論になるに決まっている。私は仕方なく、折れることにして、前の新聞への時の二倍の金額を支払うこ

ところ、この新聞の第一面ときたら、政治でも経済でもない。余り美しくない裸の女性の写真の載った、人前では広げることすらはばかれるような、立派なものであった。



そこに集まってきたのは、六〇歳の老人たちではなく、中学生そのものであった。

女性は少しく判別に時間を要する人たちもいたが、男性はすぐに名前と顔が一致した。いたずら盛りの少年たちがそこにいた。私にはそう思えた。還暦の祝の

山形大学医学部教授
富 士 郎
仙 道

還暦の祝い

集いの時の話である。東北地方の田舎では、満六〇歳の年に、一泊二日の日程で盛大に集いが開かれるのが習いのようにある。温泉に一泊した次の日の昼に街に帰って農協会館で二次会をやるというのだから、堂に入っている。話は専ら小・中学生時代の思い出と、子どもや孫の自慢話である。

小・中学時代に教わった先生の話もある。多くは理不尽に叱られた事への怒りであるようだ。五〇年も経て、そんなことが語られていようとは、先生たちは夢想だにしておるまい。げに、先生とは大

変な商売ではある。

私はと言えば、隣の席のご婦人の名前と顔が思い出せずに困っていた。相手は私のことは分かっているらしく、病気の事などに話を持っていくてくれる。私も懸命なのだが、同定できない相手との話はどうしてもおざなりになってしまふ。

それにしても、中学生時代の私は、かなりの悪ガキだったことが次々に酒を酌ぎに来てくれる友だち連の話から暴露され、私も楽しくもあった中学時代のことも思い出すことになる。

最近の荒れる中学とは少し事情が異なる。リーダー的だった小生は、気に入らない先生には、クラスの男の子を先導して、組織的に抵抗した。例えば、音楽の時間である。私の合図でクラスのほぼ全員の男子が歌うことを突如として止めてしまうのである。先生は、最初は怒るのだが、最後には泣き出してしまったこともあったりした。

何故なんなことをしたのか、もう定かではないのだが、薄ぼんやりした記憶としては、身に覚えのないことについて「あなたは頭がよいのに云々カンカン・。」と説教されたことが発端だったような気がする。私は、この郷里での会を含めて、

この一ヶ月半の間に都合、三回の還暦の祝に出席した。

先輩の先生たちから大学の教室員が還暦祝をしてくれた話などを耳にしながら、内心ではして欲しいの、「教室員などしてくれるものか」などと愚妻に強がっていた小生だったのだが、思いもかけず、本当に思いもかけず小生と愚妻のための祝の会を教室員たちが開いてくれた。

会場に到着するまで、その会が、教室で主催した国際シンポジウムの打ち上げ会だと思っていた。

会場に入ると、手作りの大きな還暦祝の看板を見つけ、思わず、目を熱くしてしまった。

大学院生の母親の手作りという真っ赤なシャツや料理好きな小生にと包丁などをいただき、すっかりいい気持ちになってしまった小生は南米帰りの時差も手伝って、何十年ぶりで朝まで酒を酌み交わした。

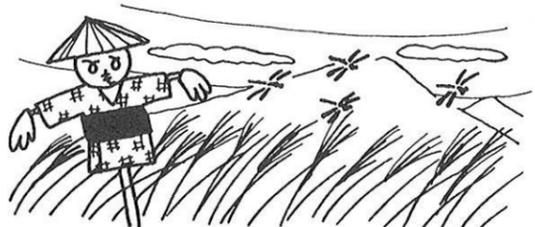
一週間足らずで五人の子どもたちと四人の嫁が、みんなの中間地点というところで那須高原のコテージを借りて、パーベキュー大会を開いてくれた。

私は、またまたいただいた真っ赤なポロシャツを着込んだまま、九時過ぎにはもう寝込んでいた。もう少し、子どもたちの話を聞いてやれば

良かったと悔やまれる。それにしても、郷里の還暦の祝の会で、帰りのバスの中で隣り合わせたK君が、六〇歳にして米の直蒔きに今年から挑戦していると熱っぽく語っていたのを忘れることができない。

「収穫の時には少し送るから」と彼がいった直蒔き米が送られてくるのを、今から楽しみにしている。

還暦の熱情のこもった素晴らしい味がするに違いない。



プロムプロム

暮らしの彩り 笹山家

五月の終わり、五歳の美季の妹で三歳の花子加わった。姉妹一緒の生活、この当たり前が別々に育ってきた二人には初めての経験となる。

美季にはその日から何か大変なものを感じながらの生活だ。何だろ？抱っこして欲しい時に惠理さんは花子を抱っこして！。花子は私の物で遊んでいる！。何で皆花子にニコニコするんだらう？。何で？。

花子の方も大変だ。どうして今までずっと抱っこ信恵さんがいないの？私の回りの人たちは何なのよ！「お姉ちゃん」って何よ？。

花子は今までと違う環境の中で自分を守ることに精一杯。姉の様々な働きかけに「イヤ」と激しく拒否。美季は花子の拒否に傷つき、怒り、そして自分を拒否する花子が抱っこされ、抱っこされていない自分に再び悲しくなる。妹は姉を拒否し、姉は妹の存在を疎むときがある。小さな二人が自分を守る精一杯の



ケンカを何度も繰り返す。わがままやいじわるの連続。泣き、泣く相手を見て謝ったり、謝れなかったり。そうやって出来上がっていく「関係」が見えだしてくる。笹山 惠理



原田家日記

午後、私は家の前の庭の草取りを始めた。雑草たちは庭を埋め尽くしていて大変な作業になりそうだった。鎌も使わず素手でがむしゃらにむしっていると、春に咲いて短く切っておいた球根から、新しい芽がのびだしていた。よく見ていると雑草と一緒にむしってしまったらしいそうなの勢いだったので、気づいたことにホッとする思いだった。



子どもと生活することは、今日の草取りと少し似ているように思えた。大人が、子どもの為にとがむしゃらになっても、丁寧さが欠けていたら子どもの中に秘められている才能や可能性をだめにしてしまうだろう。また、新しくのびる芽を雑草と見分けられるほどの注意力がなかったり、知識がなかったら、花開く手助けなど出来はしないだろう。

日常に流され埋もれていると、目の前にいる子どもたちを、よく見る注意力を失っていることが多い。

佳美や信一、将司が独りで立って生きていけるように、もう少ししっかり見つけていかなければならない。見放されなくて、しっかりと愛情を注がれ、たくさん誉められ、救される体験を可能にする力量を持ちたいと心から願っている。木部 すなお

「祐司、お水ちゃんと閉められますようにって神様にお祈りするんだよ。」

「うん」

「神様、ちゃんと閉められますように、アーメン」と祐司。

「ぼくもお祈りするよ。祐司がお水ちゃんと閉められますように。」

ケンカの絶えない兄弟ですが、いじらしく胸が熱くなるひと時でした。

お水を、ちゃんと閉められますように。

神田 幸枝



河のほとり

倉沢家

倉沢家には自立を目前にした中高生が四人いる。子どもたちが家にいるときには、担当者も出来るだけ家にいよう、やっつけて上げられることはやっつけて上げよう。そう思ってきたが、そんな担当者の思いが実は自立

を妨げるようになっていたことに気づいた。

自分では何もできない依存的な子ども、やっつけてもらって当たり前、感謝の出来ない子どもを育ててしまったように思えて、最近では、子どもたちに家のことを任せて外出する機会を増やした。

食べられるように用意して出かけていた夕食も、お金を渡して材料の調達から調理して食べ、後かたづけまでを任せる。弁当が必要な者は、早起きをして弁当を作る。

亜紀がラーメンを作ったが、スープを先に用意しなかったので悲惨な食事になったこと、横着者の沙慧が作った目玉焼きは意外に好評だったこと。そんな報告を聞くのが楽しみになってきた。

誰が、どんな失敗をしても、誰も文句を言わずに食べているのも実にほほえましい。

今のうちにたくさん失敗をして、様々な経験を重ねて自立に備える助け手になりたい。

倉沢 智子



光の中で

佐藤家

暮れてゆくのが随分早くなり、朝夕はめっきり肌寒く感じる季節になりました。そんな中、暗くなるまで子どもたちの元気な声が園庭に響いています。さて、四歳の祐司は、ここ数ヶ月、毎日水道の蛇口の閉め忘れで叱られています。何度注意しても、何故か水を出しっ放しにしたままいなくなるのです。ひどいときは誰も気づかないと三〇分以上も出していたのだらうと思われることがあり、少なくとも、毎日三回以上は注意されるのです。それでも、毎日続くのです。どうしてなんだろうと考え込んでしまいます。

きちんと蛇口を閉めていることもあり、そんな時は本当に嬉しくなっとうんと誉めるのです。色々やり方を変えて対応しても、どうにもなりません。

そんなことで強く叱ったある夜、お布団に入ってしまったら、兄の和貴がこう言いました。

子どもたちの季節

仙道家

この夏は、スカッと晴れた青い空に入道雲がむくむく、という日は少なく、どんより曇ってむしむしの日が殆どでした。

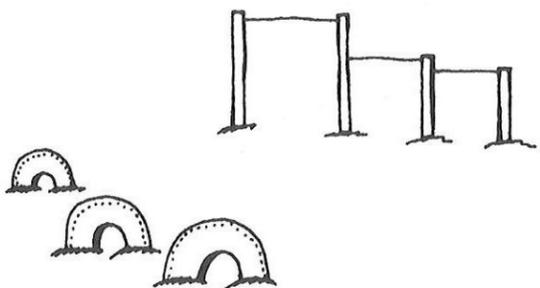
高一の漢子の夏休みもそんな具合でした。

高校入学以来、部活動、勉強も順調で毎日が充実しているようでした。そんな中で、非行を犯していたのです。それほどまでに漢子の心の中の『あな』は深く大きかったです。

ただ、私にはその穴の大きさや深さを一緒に超えることが出来なかったのです。漢子自身がそのことに気づき、受け容れ、考えることが出来るようにと、祈り、その手助けに全力を尽くすことが自分のなすべきことだと、今は思っています。

中学生として初めての夏休みの環。入学当初は、クラスの中に居ることが出来ず、休み時間は上級生の校舎で過ごしていたと聞きます。しかし、次第にクラスでも話せる友人もでき教室内で過ごせることが出来るようになったようです。

担任の先生は、環のためにいろいろと心配りをして下さり、環は毎日元気に登校していました。



お陰で夏休み中は、部活にしっかりと行くことが出来ました。

池田 祐子

現場から

光の子たちと ⑨

あまり暑くならなかったような思
いが残る夏も終わり、子どもたちの
季節は「秋」になりました。

まずは夏休みのご報告から・・・
四月から準備してきた小学生六名
のメンバーと、二人の高校生のヘル
パー、職員六名での登山が実行され
ました。

毎年お世話になっている谷本清光
画伯の阿登久良山荘への三泊四日
の旅です。到着したその日は、木登り
をしたり、木に綱を結びつけてブラ
ンコを作っていたで遊んだり、
のんびり楽しく過ごしました。

二日目、朝四時に起きておにぎり
を作り、いざ山へ！。あいにくの雨
でした。それでも登山道へ向かいま
した。十分も歩かないうちに「疲れ
たよ」という子を「最初がんばれ
ば後は楽だから」と励まし進みます。
本当はそう言って自分を励ましなが
ら・・・。それでも降ったり止んだり
の霧雨に少しづつ着ているものが濡
れ、汗が冷えて身体が冷たくなって
きます。雨で山道はぬかるみ気味で
す。未だ半分にも達していないのに
標準タイムを二時間もオーバーして

います。これは山頂まで行くのは難
しいかも知れないと思いつながらも前
進です。三叉峠が見えてきたところ
で昼食をとっている時雨は更に降っ
てきました。おにぎりを急いで食べ、
上を目指しついに山頂に到着しまし
た。

雨の中登ってきたのは、いくつか
ある中でも最も難度の高いコースだっ
たようで、山頂で出会った人々が口々
に「小学生がここを上ってきたの？
すごいねえ。将来はエベレスト登山
隊だ、アツハツハツ」と言っていて下
さりました。がんばった子どもたちも
ちよつと誇らしげです。

小学一年生の小さい体でがんばっ
た佳美、始めての登山で泣きながら
進んだ美夏、寒いと震え、下山の時
は涙をこらえながら進んで根性を見
せてくれた由花、常に先頭を行き疲
れた様子など全く見せなかった元氣
な隆一、「下るのが楽しいの」と、
ものすごいスピードで下っていった
詩美、一番年上としてみんなを引っ
張ってくれた信一、ヘルパーの将司
と、勇。それぞれの子どもたちが自
分の力を精一杯出し切って一生懸命

がんばりました。雨の中の厳しい登
山の経験は、きつとひとり一人の子
どもたちの心に残る体験となり、ど
うしても自分の力だけで生きていか
なければならぬこれからの自信の一
つになったことでしょう。

谷本画伯をはじめ、ご協力いた
いた皆さまのお陰で、今年もこんな
風に夏休みのクライマックスを創る
経験をすることが出来ました。
ありがとうございます。

秋の高い空がすがすがしく拡がり
運動会の季節がやってきました。小
学校の運動会も晴天に恵まれました。
入場行進の列を何気なく見ると五・
六年生の中にいる詩美が一人だけ何
がちよつと周りの子と様子が違いま
す。足元を見ると白いハイソックス
の中にひとり短い緑色のソックスで
す。鼓笛パレードのためにみな白い
ハイソックスで揃えるように言われ
ていたのです。何日前に渡して置
いたのですが、当日は本人も私も忘
れてしまいました。慌てているのは
私だけ。本人はちよつとも平気な顔。
いざ鼓笛隊のパレードの始まりです

藤本 曜子

詩美は花形のリングバトンで前
方を行進しています。「こんなに上
手になったんだ！」と感動してい
ふと足元を見ると、何と裸足！。私
は口をぱかんと開けてしまいました。
何のために届けたのだろう・・・。
でもパレードはとても素敵だった
し、詩美も一生懸命だったので、足
元はそんなに気にならなかったのだ
は（希望的見解）と思います。
家に帰って詩美に靴下のことを尋
ねると、全く気にしていない様子で
「別にそんなのどうでもいいじゃん」
と。そうか、たいしたことないか、
と思うことに決めました。マイペー
スな彼女なりの考えがあるのでしょ
う。



秋、たけなわ。スポーツ、部活、
文化祭、勉強も・・・それぞれの子ど
もたちの活躍の場が増えていきそ
うです。

養護メモ 75

愛される

菅原 哲男

児童養護施設光の子どもの家は、
妊られたときから期待され、喜ばれ
るといふ当たり前の経験が少ないか
全くない状況で生まれた子どもたち
に、溢れるような愛の中で育ち守ら
れて大人になった者たちが、何より
もこれまでに受けた親や家族からの
愛の日々を思い起こし、心の中にた
め込んだそれを惜しまず提供し、い
つの日か彼らが、人を愛し、人を慈
しむことが出来る主体となることを
願って建てられ、運営されてきた。

海野真智は母が十六才、父が十八
才の時に生まれた。未だ一緒に生活
する前に妊娠、母方の実家に親子
で同居していた。未だ若い母は、祖
父母というには若すぎるような彼女
の親たちに真智を預けつばなしで遊
び歩いてきた。

父は建設現場で働いていて、夜と
なく昼となく仕事の都合や仲間との
つきあいなどで家に帰ってくるこ
とが不規則だった。

祖父母は未だ若く働き盛りで、孫
を可愛がる年齢でも心の状態でもな
く、時間的にも経済的にも余裕がな
かった。

だから、真智はその誕生も喜ばれ
ず、生まれてきて愛されるといふ経
験もほとんどなく、放置されて間も
なく乳児院に入所した。真智は、光
の子どもの家に行きつてしばらく
の間は一人遊びをすることが多
かったが、担当の保母に抱かれるこ
とを覚えてからは、抱っこ抱っこの
連続で、足が退化してしまうのでは
ないかと危ぶむほどだった。

小学生になっても、みんなと一緒
に遊びたいのだが、自分が中心でな
いとだめで、他の者と共同できない。
出来ないことに不満があるからみん
なの遊びの邪魔をわざとする。結果
仲間外れにされ、その者たちをいぎ
たなく罵り激しく攻撃する。そうやっ
ていじめられることも少なくない。

ある日の夕方、担当保母が両手に
夕食の材料を持って家に入ろうとし
ていた。そこへ真智がやってきて、
「抱っこして！」と要求したが、両
手がふさがっている彼女は「今は出
来ないでしょう」と言っただけに入
って行った。すると真智は、大声で泣
き出しひっくり返って泣き叫んだ。
とって返した保母は、「どうして

そんなに分からないの!？、抱っこ
できる時と出来ない時があることが
あるんだよ。」と怒りを含んで言っ
たが、真智は構わず泣き続ける。

とうとう、そんなに分からない子
どもとは一緒に食事が出来ません、
と申し渡される羽目になった。
しばらくそんなやり取りがあつて、
ようやく落ち着いて家に入るまでに
三〇分はゆうにかかってしまった。

生まれてから二、三才頃までに、
「かわいい!」「抱かせて!」と抱く
ことを要求する大人たちに囲まれ、
頼みずりされた経験を大凡の子どもは
持つものなのである。

しかし、児童養護施設には二才を
超えた子どもたちもやってくる。もう、
ヒシと抱きたいような時期を超えよ
うとしていて、抱かれて授乳された
経験さえ持たないで乳児院からやっ
てくるのである。

そんな子どもたちに児童養護施設
では、「甘えること」や「抱かれる
こと」から教えていかなければなら
ないのである。

ここでは、学校から帰宅した時な
ど、担当の子どもから抱っこの要求
が出る前に、かわいい!抱っこさせ
て!と、力一杯抱いてやることをす
すめている。要求されてからの抱っ
この数十倍の効果があるからだ。抱っ

こされても不自然ではない年齢や身
体の成長のうちに・・・。

愛されて育った子どもたちで、問
題を起す者もいるだろう。それは
それで、愛し方に偏りや歪みがあつ
たのか点検の要があると思う。

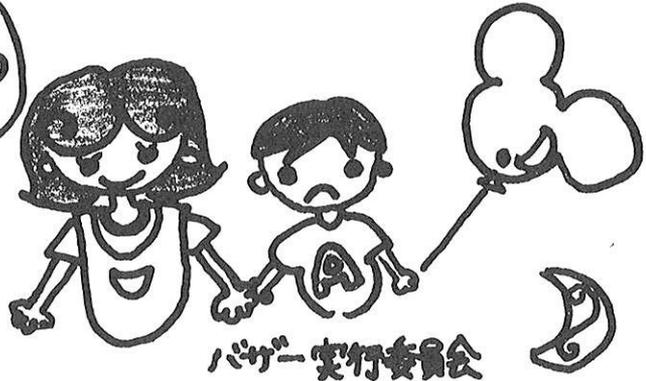
犯罪白書平成十年版によると、少
年院に収容された少年たちの聞き取
り調査で、非行を思い止まらせる最
大の要因を四十%を超える少年たち
が「家族」と答え、「悪いことをし
た」と思う対象も大半が彼らを愛し
たであろう親や家族だったのだから。
非行や規範をはみ出す行為を思い
止まらせる「家族」や「親」がいな
いか、いても機能しない児童養護施
設の子どもたちにとって決定的なハ
ンディキャップなのである。

愛され、抱っこを要求された経験
のない子どもたちが人を愛し慈しむ
ようになることが出来るのだろうか。

愛されれば誰でもが人を愛するこ
とが出来るとは言えない。しかし、
愛されない者が人を愛することなど
期待することさえできないのである。

そんな私たちの子どもたちを愛す
る関わりが、社会福祉事業法の改正
により、市場原理即ち貨幣の対価に
しか評価されなくなろうとしている。
貨幣を対価に人を愛する!。限り
なく下品になろうとしている。

第6回 職員確保のための
バザーにご協力を



☆1999年 五月下旬実施予定

バザー実行委員会

日誌抄 = 暮らしの風景 =

1998年 6月1日 ▶ 7月31日

- 6月 幼児 6名 小学生 6名 中学生 9名 高校生9名
措置外 3名(求職者2名 未自立1名)
- 1日 館山市の吉田春江氏 加須市の落合美佐子氏 町内
杓子木の真中秀宏氏 田村明美氏 しずくの会赤坂
修子氏よりそれぞれ献品をいただき 感謝
- 平野美夏入所 原田家竹花保母担当
- 2日 加須市を中心とするボランティアグループしずくの
会(梅沢三保会長)の草取りご奉仕 感謝
- 3日 東大宮の白田紀男氏より冷蔵庫のご寄付 感謝
- 4日 川口市の中村千絵氏よりバザー用品の献品を 感謝
- 東京都のSOS子どもの村より佐々木弥子施設長を
はじめ8名が見学と意見交換の1日
- 5日 町内斉藤良子氏よりお米をたくさん 感謝
- 6日 金子嘉男後援会会長が低く垂れ下がった空を睨み
ながら決行の判断を下し第5回目になった 定員外職
員確保のためのバザー実施 日中はよく晴れてバザ
ー日和 後援会11名 しずくの会13名 学生ボラ
ンティア20名のお手伝い下さった方々と お出で
下さった方々に心から感謝
- 9日 神愛ホームより藤波施設長以下3名が見学と研修に
- 16日 町内の山本愛子氏 中島睦雄氏 桑尾たえ子氏 栗田
久男氏より献品をいただき 感謝
- 18日 高3の高山嬉思春期の精神不安定により入院 両親

- が妊娠出産の前後に薬物中毒に冒されていたことが
大きな原因の一つと推量される悲劇 シンナー覚醒
剤などの薬物濫用に警鐘乱打
- 24日 林光製作所近藤栄社長よりワゴン車のご寄贈 感謝
- 27日 トワイライトスティ第1号受入
- 7月
- 6日 町内の針ヶ谷文英氏 今成みつ子氏 農協の塩田氏
台 明氏 中島幸雄氏 横浜市の大段聖子氏より献品を
い いただく感謝
- 千葉県の知的障害児施設楨の木学園より施設長以下
3名が見学と交歓に
- 8日 恒例になった感じの新座市 志木市の蕎麦屋さんが
来訪して手打ち蕎麦の実演と夕食会を後援会が主催
して 島田徳三町長も駆けつけ感謝状の贈呈をして
労をねぎらって下さる 感謝
- 18日 終業式 夏休み前夜祭
- 27日 江森ヘアーサロンより散髪のご奉仕 ありがとう
- 長野県小海町にある谷本清光画伯のアトリエに宿泊
させていただき 小学生がハケ岳連峰の主峰赤岳に
登頂 いつも完璧にご準備してお待ち下さる谷本画
伯のご厚意は光の子どもの家の宝物だ 感謝
- 30日 恒例の女子聖学院CCFワークキャンプ 聖書に聴
き祈りそして労働する汗の美しさ 感謝(くら)

反 射 光

☆台風十号で園庭の桜の枝がすっか
り裸になりました☆この夏たくさん
の方々のおかげで子どもたちの「夢」を
育てる冒険や試みが出来ました☆開
設以来十数年になる湯河原の海水浴
に行った子どもが、大きな海に向かい、
「ねえ、この海はお空とつながって
いるの？ずーっと泳いでいくとお空に行
けるの？」と真剣な眼差しで聞いた
という。微笑ましいひとときはその子
どもにとって「夢」のある現実を垣
間見たのでしよう☆朝日新聞厚生事
業団の主催する海外生活体験の旅に
応募した高二の紅子が見事この暮れ
にアメリカにホームステイします☆国
際的な働きをして地球規模で人の役
に立ちたいと中学生の後半からそんな
「夢」を暖めて、それが可能かも知れ
ない高校に入学して大学を目指して
いました☆そんな子どもたちの「夢」
に見劣りしないような「夢」を大切
にしたいと思っています☆地域の子ど
もの問題を解決するためのお役に立っ
こと、今、私たちの「夢」のひとつ
です。乞う支援 (哲)